

Sophia English Language Department Alumni Association

E.L.D.A.A. News

上智大学英語学科同窓会会報

No.
51

発行日：2011年1月20日

発行者：田中 真 / 編集者：小笠原 宏司 / レイアウト：鈴木 博文

青天の霹靂

上智大学英語学科同窓会会長 田中 真

今年度の総会で会長に選任された際の所信表明において、「青天の霹靂」と発言したことについて、「もっと真剣に」と、ある会員から後日お叱りを受けました。しかし、この言葉には、思いがけなく、嬉しいことが舞い込んできた、という意味もあり、私としては前向きな気持ちで述べたつもりだったのですが、…。それはさておき、それから早くも半年以上が過ぎ、(我々が「真剣」であったかどうかは、後の評価に委ねます)これまでの振り返りと、この先のSELDAの「あるべき姿」について思うところを述べます。

SELDAとは一体何者なのか、というところから我々の議論はスタートしました。単に「同窓会」ということならソフィア会があるのではないかと。実際、8,000名余の会員が登録されているとはいえ、その活動内容をご存じの会員、さらに、実際に活動に参加したことがある会員は今日まで極めて限られています。

SELDAの活動を卒業生だけに絞るのではなく、他の組織やSELDA会員以外の個人も広範にその対象とすることによって、多方向に向かって拡大したい、すなわち、卒業間もないOB・OGおよび現役学生の同窓会活動への巻き込みを縦の軸、上智学院、ソフィア会、他学科同窓会、などとの連携を横の軸とした活動となります。常任委員の一人が、ご自身の職業についてCatalystのようなもの(異分野のエキスパート同士の出会いの場を作

り、そこから新しい発見や考え方を導くコーディネーション)と話してくれましたが、SELDAも上智という大きな空間の中で、Catalystとして作用し、新たな出会いが実現できる団体となることが究極のゴールだと考えています。

それを実現するには、過去の活動にとらわれない発想が必要と考え、あえて人心を一新し、上に述べた組織や個人とのコミュニケーションを円滑に進められる人材を三顧の礼で常任委員に迎えました。その結果、活動開始後の早い時期から上智学院、ソフィア会、英語学科、従来は同窓会活動への参画の機会が少なかった卒業生も同窓生の皆さん、さらには現役の学生諸君とも短期間で交流することができ、SELDAのプレゼンス向上を推進できました。活動内容の一部は本号およびSELDAホームページにて紹介しておりますのでご高覧いただければと思います。

なお、本号より会報のWeb化に踏み切りました。印刷物を郵送することのメリットも多々あるものの、ITの活用が当たり前になっている世の流れを考えたときに、我々もそれにならうべきと判断した次第です。SELDAにとって、大きな変革の一つであり、我々も慎重に事を進めてゆきます。また、Web化により、人的、金銭的に削減できるリソースを先に述べたような関係者との一層の連携を推進する活動にも振り向けたいと考えています。SELDAが変わるため、進化するため、会員の皆様の同窓会活動への積極的な参画および忌憚のないご意見をお願いいたします。皆様の声に真摯に耳を傾けながら、舵取り役として愚直な努力を続けてゆく所存です。



英語科丸のかじ取り役として

上智大学外国語学部英語学科長 石川 彰

早いもので2010年度も余すところ半年を切ってしまつた。まさか自分が学科長の役を仰せつかることになろうとは思ってみなかったが、諸般の事情でこの役を引き受けることになり、まがりなりにも一つの組織の調整役を務めることの難しさを毎日感じている。

とは言っても、船にたとえれば、この「英語科丸」は放っておいても進みはするので、楽なところもある。もちろん、教員も学生も日々怠りなくこの船の進み具合を見張っているのだが、いかにせん、長く乗っている者から見れば老朽化が目につく。ここも直したい、あそこも直したいと傷んだところが気になるが、応急の処置では間に合いそうもないのが昨今の様子である。

小生が、乗船したのは1970年、以来卒業しても船を降りることもなく居続けて、その内乗組員の仲間に加えてもらい、とうとうかじ取り役にさせられてしまった。前任者の小塩先生は別の船から移って来られて間もなくこの役を果たされたわけだが、そのご苦労はひとしおであったろう。

大学の2年生のとき、英検1級に受かり、優良賞をもらった。満足に英語が話せなかった自分の進歩がうれしかった。Forbes先生の発音訓練を始め、多くの神父様がたの献身的で愛情のこもった授業がなつかしい。音声学の中野先生、比較言語学の岸村先生など日本人の恩師も大部分がすでに鬼籍にある。今日の英語科丸は学生にとって、同じような進歩や成長が実感できる場所であり続けているだろうか？

「英語と社会」という授業では、卒業生の方々が卒業後の人生を語ってくださる。大学にしか勤めたことのない自分のような者には、講師の方々のその後の人生の話は興味が尽きない。すべての卒業生に講師役をお願いできたらと思うことが間々ある。だから、SELDAは卒業生全員と学科を結ぶ窓のようなものになってほしい。それぞれのその後の人生がある時は近く、ある時は遙かかなたに見えるような窓があればなあと思う。

数年前から学科で担当の授業はすべて英語で行うことにした。受講生が10人を切ることも多かったが、今学期は20人近い学生を相手に、日本語なまりの英語で奮闘中である。学生のプレゼン力は中高の指導要領のおかげか、ここ数年グンと進歩している。幅広く本を読み、それを英語でドンドン人に伝えられる、そんなことが授業で当たり前になるような日がいつか来ないかと夢をみている。教える者の資質と工夫が問われているといつも肝に命じたい。

ソフィア会とSELDAのさらなる連携を求めて

＝上智大学創立100周年に向けて卒業生の輪を広げましょう＝

上智大学ソフィア会会長 和泉 法夫

上智大学ソフィア会会長として、一言ご挨拶を申し上げます。

日頃からの大変活発な上智大学英語学科同窓会(SELDA)の活動に敬意を表すとともにますますのご発展を祈念しています。

私は一昨年の2008年にソフィア会会長に就任いたしました。また、1983年の外国語学部創設25周年を機に上智大学英語学科同窓会(SELDA)が設立され、2008年には設立25周年を迎えられたとのこと、遅ればせながら改めてお祝い申し上げます。

上智大学の同窓会であるソフィア会は既に12万人を超える会員(学部大学院卒業生/専門部/国際部/推薦会員/客員)を擁する大きな組織になっています。卒業生の構成は平成卒業生数(1989年以降)が50%を超えています。また全世界で地域・各種ソフィア会220団体(2010年10月時点の登録団体数)が活動しています。

今年で卒業生の約7%にあたる約8,200人を超える卒業生を輩出している英語学科は、上智大学の知名度を飛躍的に高める原動力となった外国語学部のなかでも、人気、学生数とも学内有数の学科として認知されています。また設立当初から、我が国の英文学界屈指の日本人教授陣に加え、多くの外国人イェズス会司祭が教鞭をとり、彼らの惜しめない愛と情熱によって育てられた、まことに上智らしい学科の代表的存在であるといえます。

その学科同窓会としてのSELDAが、上智大学創立100周年とその先の未来を見据え、絆を強め活動されることは母校に対する大いなる貢献につながると思います。

上智大学ソフィア会は、2013年の上智大学創立100周年に向けて、上智大学とともにさまざまな記念事業を共催しており、母校の発展と現役学生への支援を目指して、新しい取組みを実行に移しています。またSELDAに代表される学科同窓会を含む各種ソフィア会の活動に加え、日本のみならず世界各地で展開されている地域ソフィア会によって支えられており、その充実が将来のソフィア会、ひいては上智大学の発展にとって大きな鍵となっています。

今後とも上智大学ソフィア会と英語学科同窓会が連携して母校の発展に寄与していくべくご支援ご協力をお願いいたします。



Summer Teaching Program (STP)報告

STP盛岡 大林 孝成

英語学科教授、吉田研作先生が学生時代に創設、既に40年の歴史を誇る英語学科学生の自主運営によるSTPが、2010年度も8月2日～9日を中心に、小野田、下関、室蘭、盛岡、足利、静岡、そして開始2年目となるカンボジアで開催されました。

昨年度インフルエンザの影響で活動が中止になったSTP盛岡は、毎年1、2年生を対象にしていたところを3年生までの全学年を対象としての活動になりました。

今年度はSTP盛岡の活動が初めて地元新聞に取り上げられ、岩手県知事に表敬訪問するなど、地域からの注目を集めることとなりました。



STP室蘭 杉浦 智佳

例年多くの参加者が集うSTP室蘭は、小学5年生～中学3年生までの総勢約70人の子供たちが参加してくれま

した。英語でやった桃太郎を題材とした劇では子供たちが全部英語のセリフを覚えてきて、メンバーも保護者の方々も驚くほど完成度が高かったです。

活動期間中にNHK室蘭や北海道新聞社の方が取材をしいらっしゃるなど、地域の方からの関心を示していただけました。

STPカンボジア 西田 千里

2回目となったSTPカンボジアは、昨年は授業内容を高度にしすぎたため、今年はなるべくゲーム要素を取り入れた授業を多めに行いました。全体授業として行ったダンス（ソーラン節）は生徒たちが恥ずかしがっていた割には楽しんでくれてほっとしました。また、昨年大人気だった縁日（書道、浴衣体験コーナー、折り紙、駄菓子釣り）はやはり今年も人気があり、生徒たちも非常に喜んでくれたようです。

なお、吉田研作先生が理事をされている The International Research Foundation for English Language Education (TIRF) のホームページにSTPカンボジアに関する記事が「Japanese Teachers-in-Training Volunteer Service in Cambodia」というタイトルで掲載されました。(http://www.tirfonline.org/community/projects/)



“本音の仕事”とキャリア探しセミナー報告

去る10月20日（水）、11月24日（水）と2回に渡り、英語学科・SELDA共催、東郷教授の全面的協力を得て、参加延べ23人（主に英語学科3年生）を対象にセミナーを行いました。

第一回目は、パネラーとして内藤昭男さん（84法法、セイコーホールディングス勤務、奥様は83年外英）、毛利桜子さん（84外比、ホテル西洋銀座勤務）、末松さやかさん（85外英、アイ・エム・エス・ジャパン勤務）に参加いただきました。入社以来一つの会社に勤め続けるキャリアや幾度か転職、独立を試みて、今日の仕事に辿りついたキャリアをご披露いただき、その中でのそれぞれの仕事（マネジメント、サービス・ホスピタリティ、教育・研修）に対する深い想いを感じていただけたと思います。

第二回目は、パネラーとして笹沼雅由子さん（99年外英、国際文化会館勤務）、加藤智美さん（99年外英、スペインアンダルシア州政府輸出促進公社勤務）、渡辺剛さん（01年外英、住友商事勤務）、馬場さん（00年外英）に参加いただき、今日同様の就職氷河期に就職活動をした経験談、帰国子女ではないのに全員がその時期に海外に留学をされ、それぞれの道を探られた経緯などを伺いました。年齢の近さもあり、学生たちが、時間が来ても席を立たずに質問を続ける姿に関心の高さを感じました。

この2回を通して、企画側同様、パネラーのみなさんも、自分の経験や体験をシェアすることにより、現役英語学科学生のみなさんにも何かの貢献ができたと感じていただけたのでは、と思います。次回は、より多くの職種や卒業後数年の方々のお話を聞きたいとの学生アンケート希望があり、SELDAも今後一層現役サラリーマンや卒業後数年の若手のご協力を切にお願いいたします。



「ブラジル移民の赤ひげ先生 — 高岡専太郎」出版プロジェクト

長谷川 真弓 (1963年卒業)

秋田生まれ、家が没落し小学校4年生でおしんのよう
に丁稚奉公に出、10年間の年季があけて上京し、独学で
東京薬学校（東京薬大）卒業。その後日本医学校（日本
医大）を卒業しブラジル移民の医者になった高岡専太郎
を追いかけた。笠戸丸で第一陣が渡った10年後の1918年
渡白。どの入植地もマラリアに侵され死人の群れ。しか
しそのことは日本に伝えられず次から次へと移民が送ら
れた。「人の命を軽く扱う文明国なんてどこにあるか!!」
と彼は憤る。

専太郎は何度も土地の選定、予防医学の確立などを
含む移民政策の再検討を政府に進言するが全て領事館で
没にされ、更に日本を敵にまわす非国民と烙印を押される。
その時に京都大学の戸田正三博士が渡伯し、専太郎の孤
軍奮闘ぶりに手を差し伸べる約束をする。つまり政府を
敵に回しても京大の学術誌に専太郎のマラリア研究を
つぶさに載せてくれたのである。これが契機となり日本
の医学関係者、及び知識層にブラジルの現状が伝わった。

結果的にはこの学術誌の論文により京都大学は専太郎
に医学博士を授けている。京大が現在でもこの論文を全
て特別資料として保管していると知り、弟押切宗平と京
都へ出かけた。かなり厳しい手続きを経て入手した許可

証をもって大学図書館へ。運転免許をあずけ、図書館奥
の特別閲覧室へ案内される。紙とHBの鉛筆数本、消し
ゴム以外は持ちこめない。撮影、録音禁止。真ん中のテ
ーブルに既に準備されていた昭和5年の専太郎の小冊子
状の論文が8冊（一冊はポルトガル語）を食い入るよう
に読んだ。特に領事館が拒絶した「平野植民地の全村死
滅の悲惨な現状」の生々しい記録からは無念の死者のう
めきも聞こえる。

今回の出版に際は、資料の精査に努めた。例えば専
太郎がブラジルから一時帰国するときの出発の日時、帰
港する港、貨客船として積んでいた荷物。大阪商船三井
船舶には正確な航行記録があり、広報の担当者からマニ
ラ丸は行きはインドー喜望峰で、サントス発日本行きは
ベッドをたたんでコーヒー、砂糖、綿花を積みパナマ経
由で日本に向かうことが分かった。また東京薬学校の時
間割は朝の6時～8時、夜の6時～8時。隣の寛永寺の鐘の
時刻と同じ。専太郎が書き遺した書簡は八十通。全てが
毛筆で判読は姉が担当した。最も長い手紙は何と6メー
トル15センチもあった。時代考証などのチェック、資料
の選択などは上の弟夫婦、編集は全面的に私が担当。中
心になった下の弟宗平とは横浜で3回合宿し、内容の最
終チェックや、出版前に連載するブラジルの新聞社との
連絡を取った。出版直前段階では秋田で2回チーム全体
の合宿。アラ還&アラ古希の姉弟6人でこの本を世に送り
出すために奮戦した。終わった後の疲れが心地よい。現
在サンパウロでポルトガル語に翻訳中である。（無明社
出版）

会費納入のお願いと納入方法

SELDAAは、会長の運営方針にもあるように、従来の
同窓生間を対象とした活動に加え、上智学院、ソフィア
会、現役学生、他学科同窓会など多方面にわたって交流
するよう計画しています。そのためには、会員の皆様か
らの会費をもとに長期的に安定した収支計画を立てるこ
とが前提となります。

今年度は既報のとおり、現役学生を対象にしたセミナ
ーを2回実施いたしました。来年度からはそれに加え、
外部講師の招聘や英語学科教員による講演会、その他卒
業生、現役学生を交えた交流の場作りなどの実施、およ
び後輩のための上智学院への寄付活動などを計画してい
ます。さらには従来から実施されてきた、会員が企画す
る勉強会や講演会への支援活動も前向きに進めていく所
存です。

会員の皆様からお預かりした貴重な会費は、厳正かつ
適正に管理し、透明性を持って運用させていただきます
ので、同窓会活動へのご理解、ご協力をよろしくお願
い申し上げます。

【会費の納入方法】

会報のウェブ配信にともない、従来、会報とともに郵
送していた振込用紙による納入方法をあらため、下記銀
行口座への振込みによる納入に変更いたします。ただし
経過措置として当面の間、従来の振込用紙による納入に
も対応いたします。

詳しくはSELDAAホームページをご参照ください。
(<http://seldaa.net/>)

振込先：三菱東京UFJ銀行京橋支店
普通口座 No.1173610
口座名義：上智大学英語学科同窓会

振込みに際し、会員氏名の前に卒業年（西暦）をご記
入ください。

（例：2001ジョウチタロウ）

また、入金処理を円滑に行うため、振込み後、
SELDAAホームページにある「卒業生連絡フォーム」を
用いて、送金の旨をご連絡ください。

会費の納入状況については、同じく「卒業生連絡フォ
ーム」からお問合せください。できるだけ速やかに回答
いたします。



SELDAA新役員のつぶやき

小笠原 宏司（副会長／1979年卒業）

そんな時代もあったねと、いつか話せる日が来るわ♪・・・学生時代って、そんなもんですな。でも、大学は今も経営を続け、学部は歴史の波に揉まれ、学科は現実と向き合っている。母校は、単に履歴書の一行でもあるまいし。で、この歳からちょっとお手伝い。

中村 寛（副会長・事務局長／1984年卒業）

高校受験を迎えた息子に触発され、久しぶりに「君たちはどう生きるか」（吉野源三郎著）を読みました。おじさん曰く、「人間は自分の行動を自分で決定する力を持つ。だから誤りを犯すし、誤りから立ち直ることができる」のだそうです。自分も会社も（同窓会も？）立ち直りから入りたいものです。

鈴木 博文（常任委員／1974年卒業）

在学中はSELF（学科会）で副会長、1983年のSELDAA設立時も副会長でした。母校とはその時々で関わってきましたが、SELFの時に支えてくれた後輩が会長を引き受けたので行きがかり上、会長を支える立場になりました。学科長も同期、上智の中で人とのつながりを大事にしていきたいです。

小泉 究（常任委員／1975年卒業）

つぶやきかぁ。140文字？会長命令なんだから、なんか考えなくちゃ。卒業35年を経過した71-5026の小泉だ。1970年代初頭のSELFでは何かしらの活動をした記憶（自身は全く覚えていない）があるが、SELDAAとなると殆ど馴染みがない。郵送物の宛名に「未」が続いて、上智とは縁もゆかりもない家内から終身を払えと（続く）

夏目 正明（常任委員／1977年卒業）

卒業してから三十数年の間、上智大学のキャンパスを訪れたのは数回のみで、私にとって母校は遠くから想う心のふるさとのようなものでした。このたび、ご縁があってSELDAAの常任委員を務めることになり、ミーティングなどの用事でホームカミングの機会が増えたのはとてもうれしいことです。

鶴岡 容子（常任委員／1977年卒業）

会計を手伝わせて頂いています。大学4年で結婚をした専業主婦で今の時代には珍しい卒業生かもしれません。3人の子供を育てながら夫の母と同居して昨年まで15年間を義母中心の生活でした。自分の時間が持てるようになり久しぶりに訪れた同窓会で、暇そうに見えたのかこんなお手伝いしております。

川崎 依子（常任委員／1978年卒業）

クラスの同窓会はわりと定期的に行われていますが、同窓会全体の動きには殆ど無関心でした。ただ、仕事でも地域活動の面でも、ソフィア人脈には本当にお世話になってきましたので、地方在住で直接にお役に立てない分、人の繋がりの面からお手伝いできればと思っています。

笹沼 雅由子（常任委員／1999年卒業）

民間の国際交流財団で、文化交流、知的対話、グローバル人材育成などの事業に携わっています。いつも変わらずそこに存在し、いつでも温かく迎え入れてくれる、私にとっての母港のような存在の上智、そして外英のために、微力ながらもお役に立てることがあれば、と思っています。

数原 安子（会計監査員／1977年卒業）

母校のために力になりたいと思うんだけど、力量不足、時間不足は否めないなあ。時々会議に参加して的外れなこと言おうかな、と思っている73-5203数原安子（秋山）でした。

藤代 芳正（会計監査員／1978年卒業）

社会人になってから東南アジア等に駐在し、いろいろな国の「言葉の海」を泳いできました。財務関係の仕事をしておりますが、この度英語学科同窓会の会計監査役を担当させていただくことになりました。True and Fair View でいきたいと思えます。よろしくお願ひします。

編集後記

ノーベル化学賞を受賞した米パデュー大特別教授の根岸英一氏（75）の1月6日の会見の冒頭。「私は日本の（悪名高い）受験地獄の支持者だ」。理由は、高度な研究になればなるほど、「基本が大事になるから」。それを叩き込んでくれたのが、日本の教育だった、というわけだ。その反面、そんな日本を飛び出すことになったのは、フルブライト留学制度での米ペンシルベニア大の留学。「博士号を取得して日本に帰ってみると、日本には私を受け入れる余地は全くなかった」からだそうだ。

文部科学省は、2008年に海外留学した日本人が、前年比11%減の66,833人だったと発表した。「不況や就職活動の早期化、学生の内向き志向などが原因」と同省は分析。「閉鎖性」とか「島国根性」なんて、もはや死語かと思っています。

さてさて、今年のSELDAAは、どこに飛び出すのか？ 会員、現役大学生のためにどんなことができるのか？

皆さま、本年もよろしくお願ひいたします。

Sophia English Language Department Alumni Association

E.L.D.A.A. News

上智大学英語学科同窓会会報

発行：上智大学英語学科同窓会 〒102-8554東京都千代田区紀尾井町7-1上智大学英語学科事務室気付
Tel. 03-3238-3719 Fax. 03-3238-3910 URL. <http://www.seldaa.net>

No. 51